



1	2	3
4	5	6
7	8	9

1. 地掛鉄絵泰文茶碗 1955年 益子 径12.0cm
し かけ て つ え き び も ん ち や わ ん
2. 白掛藍鉄絵扁壺 1928年 沖縄・壺屋窯 高22.2cm
しろ かけ あ い て つ え へ ん こ
3. 鉄砂土瓶 1937年 益子 高15.5cm
て つ し や ど び ん
4. 塩釉押文花瓶 1955年 益子 高33.0cm
し お く す り お し も ん か び ん
5. 青釉押文十字掛角皿 1958年 益子 幅29.3cm
あ お く す り お し も ん じ ゅ う じ が け か く ざ ら
6. 赤絵角瓶 1938年 益子 高28.6cm
あ か え か く び ん
7. 鉄絵泰文花瓶 1937年 益子 高34.8cm
て つ え き び も ん か び ん
8. 白釉黒流描鉢 1960年代 益子 径56.5cm
しろ ぐ す り く り な が し が き は ち
9. 飴釉盛絵花瓶 1954年 益子 高19.6cm
あ め ぐ す り も り え か び ん



開館時間：午前10時～午後5時（入館は16時30分まで）
 休館日：月曜日（ただし祝日の場合は開館し、翌日振替休館）
 入館料：一般1,100円 大高生600円 中小生200円
 交通：京王井の頭線駒場東大前駅西口から徒歩7分
 所在地：〒153-0041 東京都目黒区駒場4丁目3番33号
 電話番号：03-3467-4527
 西館公開日（旧柳宗悦邸）：
 会期中の第2水曜、第2土曜、第3水曜、第3土曜日（入館16:00迄）

<http://www.mingeikan.or.jp/>

日本民藝館

生誕120年
記念

濱田庄司展



2014年6月17日(火)～8月31日(日) 日本民藝館

協力・(公財)濱田庄司記念益子参考館、益子陶芸美術館

〔写真〕緑釉黒流描鉢 1956年 益子 径50.5cm



自作品の前に立つ濱田庄司
1941年頃 日本民藝館にて



ガレナ軸蓋壺 1922年
セント・アイヴス 高15.0cm
濱田庄司記念益子参考館蔵



きょうじもくぞう
脇侍木像
朝鮮時代 高62.0cm
濱田庄司記念益子参考館蔵

濱田庄司の歩んだ道

生誕120年を迎える陶匠 濱田庄司(1894–1978)。自らが歩んだ道を「京都で道を見つけ、英国で始まり、沖縄で学び、益子で育った」と述懐しています。本展では、館蔵する濱田作品を中心に、作陶の糧とした蒐集品など約200点を展示し、濱田の仕事を「手（創作）」と「眼（蒐集）」の両面から紹介します。さて、濱田は、現在の神奈川県川崎市に生まれました。1913年に東京高等工業学校(現・東京工業大学)の窯業科に入学。同校では、2年上級の河井寛次郎と親交を結び、卒業後は河井と同じ京都市立陶磁器試験場に入所しました。この時期、個展会場で知り合ったバーナード・リーチを千葉県我孫子の柳宗悦邸に訪ね、その折に柳とも知遇を得ました。1920年、職を辞してリーチと共に渡英。3年半にわたる英国での生活は、良き仕事を支える暮らしの大切さを認識する契機となりました。また、日用雑器としてのスリップウェアの発見も、濱田にとっては大きな収穫となりました。ロンドンでの個展を成功させた濱田は、関東大震災の報せを受け1924年に帰国し、京都の河井家にしばらく逗留しました。ちょうどその頃、京都に転居していた柳は、濱田の仲立ちで河井と親交を結びます。そして程なくこの三人によって、日用雑器の美を賞揚する「民藝」という概念が世に提示されていったのです。その後、濱田は関東を代表する民窯の地、栃木県益子に生活の拠点に定めました。そして、自らの眼で蒐集した古今東西の品々を創作の糧にしながら、日本はもとより各地の陶技を用い、用に即した簡素で重厚な作風を確立していったのです。1952年、柳やリーチと共にダートン国際工芸家会議に参加して、欧米への民藝思想の普及に貢献。1955年、第一回重要無形文化財保持者(人間国宝)に認定。1961年には柳宗悦の跡を継ぎ日本民藝館の二代目館長に就任。1968年には、文化勲章を受賞しました。そして、1977年には、益子の自邸・工房の一部を活用し、自らが作陶の参考とした品を多くの人にも「参考」にしてほしいとの願いから、益子参考館(現・濱田庄司記念益子参考館)を開設しました。さて、濱田は自身を終生「陶工」と称しておりました。そこには、無名の工人の手になる無垢の美を理想に掲げた、民藝美論の実践者としての姿が見て取れましょう。尚、本展の開催にあたり、濱田晋作氏、濱田友緒氏のご協力を得ました。御礼申し上げます。

濱田庄司の陶技

日本民藝館が所蔵する濱田庄司作品は約450点。作陶の拠点となった益子の土と釉薬を用いた作品がその中心です。濱田が得意とした作陶の手法には、古今東西の様々な技法が取り入れられています。例えば、偶然性を伴う「流掛」の技法は、日本の民窯にみられる伝統的釉技の一つ。他力の美を志向した濱田の仕事の特徴を良く表しています。「刷毛目」「面取」「指描」の手法は朝鮮陶磁器の伝統から学んだもの。「赤絵」の装飾は中国の宋・明の赤絵や琉球赤絵への憧れから始まり、「塩釉」の釉法はドイツで用いられてきた技法を、濱田が独自に応用しました。なお、濱田作品の絵付文様に「黍文」の意匠が数多く見られます。これは沖縄で見た砂糖黍を濱田が独自に文様化したものです。

○本展の入館券をお持ちいただくと、下記展覧会が割引になります ※詳細はHPをご覧ください
益子陶芸美術館「生誕120年記念 濱田庄司七十七歳展」 9/14–11/16
濱田庄司記念益子参考館「濱田庄司のインテリアスタイル展」 7/19–12/14

記念講演会 濱田庄司の益子焼スタイル

〔講師〕濱田友緒(陶芸家 濱田庄司記念益子参考館館長) 7月4日(金) 18:00–19:30
会場・日本民藝館大展示室 料金・300円(入館料別) 定員・100名(要予約)

展示室 1 階

〔玄 関〕生誕120年記念 濱田庄司展 一手の仕事ー

特別展として開催中の「生誕120年記念 濱田庄司展」より、館蔵する濱田作品の中から代表作を中心に紹介します。用に即した簡素で重厚な作品の数々をご覧ください。なお、壁面には親交のあった棟方志功の書を展示いたします。

〔第1室〕沖縄の紅型と陶器

1918年以来たびたび渡沖した濱田庄司。「沖縄で学び」と濱田が述べたように、沖縄の手仕事・作り手・風土から多くの薫陶を得ました。本展示では沖縄工芸の華ともいえる紅型と壺屋等の陶器を紹介します。濱田が讃えた琉球王朝時代の造形をご覧ください。

〔第2室〕西洋工芸

1920年、濱田庄司はバーナード・リーチに伴って渡った英国で、西洋の暮らしや工芸品等から強い影響を受けました。濱田は英国を自身の創作活動の「始まり」とも語っています。濱田と縁の深い、英国を中心とした西洋工芸の優品約40点を展観します。

〔第3室〕台湾の諸工芸

戦時下にあった1943年、柳宗悦は台湾を旅して先住民の作った工芸品を蒐集しました。「蜀江錦」と肩を並べるほど美しいと賛えたパイワン族の緻密な織物をはじめ、トンボ玉や牙のアクセサリー、棚などの竹細工、箱や機道具などの木工品を紹介します。

展示室 2 階

〔大展示室〕生誕120年記念 濱田庄司展 一手の仕事ー

〔第1室〕白色の朝鮮陶磁 ー白磁と粉青沙器

朝鮮時代の白磁の肌は、青味がかっていたり、長年の使用によるしみが景色になっていたりと、朝鮮白磁独特の表情を見出すことができます。本展示では、朝鮮時代の白磁を中心に、粉引や刷毛目などの陶器(粉青沙器)を交え、白色の朝鮮陶磁の魅力に迫ります。

〔第2室〕バーナード・リーチと河井寛次郎

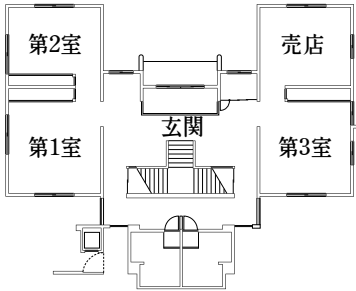
濱田庄司の作陶に大きな影響を与えたバーナード・リーチ。そして河井寛次郎は、東京高等工業学校、京都市立陶磁器試験場で濱田庄司とともに研鑽を積み、生涯にわたり深い親交を結んでいます。濱田とともに、独自の作風を確立した二人の作品を展示します。

〔第3・4室〕生誕120年記念 濱田庄司展 一眼の仕事ー

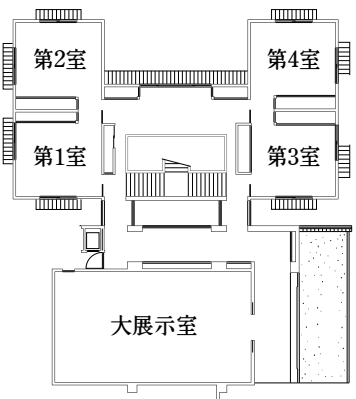
濱田の自由闊達で旺盛な創作活動は、その優れた審美眼と深く結びつくものでありました。自らの眼で蒐集した、日本本土はもとより、沖縄、朝鮮、イギリスなど、この部屋に展示されている古今東西の品々から美の生命を感じ、創作の糧としていったのです。

記念茶話会 濱田家のお茶の時間

〔席主〕濱田琢司(南山大学人文学部 准教授) 会場・日本民藝館西館(旧柳宗悦邸)
8月2日(土) 10:30–12:00、14:00–15:30、各回30名(要予約) 会費 2,000円(入館料込)



〔2階第1室〕白磁壺
朝鮮時代 18世紀前半 高54.1cm



〔2階第3・4室〕スリップウェア鳥文皿
イギリス 18–19世紀 径28.0cm
濱田庄司記念益子参考館蔵